

ショウガ



ショウガ (ショウガ科 ショウガ属)

戸外で作業ができない冬季に、ストローやたついで暖を取りながら、春の作付け計画を立てることをストロー園芸といいます。種苗会社からカタログを取り寄せると参考になります。掲載されている野菜の大半は、ベランダでも栽培できます。

多くの家庭の冷蔵庫にはワサビやカラシ、ニンニクなどのチューブ入りスパイスが常備されています。いつの間にかショウガもチューブ入りを使うようになりました。台所におけるし金がない家庭もあります。子どもたちはショウガはチューブの中に入っていると思っ

てもいいかもしれません。春になったら、ショウガをベランダで栽培しましょう。添加物のない、本物のショウガです。塊茎の大きさにより大・中・小ショウガがあり、大ショウガには



「印度」、中ショウガには「房州」、小ショウガには「谷中」などの品種があります。キッチンガーデンでは、小ショウガを使用し、筆ショウガ、葉ショウガ、新ショウガと順に楽しむと良いでしょう。

ショウガは高温を好むので、4月下旬から日当たりの良い所で栽培を始めます。深さ15cm以上のプランターに市販の培養土を入れ、種ショウガを10cm間隔に、芽を上にして植え付けます。種ショウガは前もって、2〜3芽を付けて50gほどに分割し、2〜3日乾かしておきます。覆土は5cmとします。プランターにビニールを掛け保温すると、発芽が早まります。乾燥と過湿を嫌うので、水やりは朝夕に土の表面が乾く程度にします。追肥は1000倍の液肥を、灌水（かんすい）を兼ねて1週間に1度施します。小まめに増し土をします。

7〜8月に新芽の元に新しいショウガが付くので、種ショウガを掘り上げないように手で押さえて引き抜き、筆ショウガとして利用します。新しい根が少し肥大したら葉ショウガ、初秋に塊茎が大きくなったなら新ショウガとして収穫します。

JAグリーン
津店が教える！
ショウガ
栽培のポイント！



JAグリーン津店 城チーフ

〈土〉

有機質豊かで保湿性に優れた土を選びましょう。

また庭植えをする場合は、酸性の土壌には不向きのため、石灰を混ぜ込んでアルカリ性にしましょう。

〈連作障害〉

ショウガは連作障害を起こすので、プランターの土は入れ替えることをオススメします。同じ土を使う場合は1年以上あけるようにしましょう。

〈水やり〉

上記のように乾燥に極端に弱いので、特に梅雨明け以降の夏場は水切れしないように注意して水やりをしてください。

〈病気〉

葉が黄色くなり悪臭を放つ「根茎腐敗病」にかかると、他の株にも影響します。万が一病気を発見した場合は、発病株と周囲の土ごと取り除きましょう。オーソサイド水和剤が有効です。



アスパラガス



あなたも今日から 栽培名人

板木技術士事務所 板木利隆

栽培計画	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1年め (苗床)			🌱									
2年め			🌱									✂️
3年め以降					🍷							✂️

🌱 種まき 🌱 植えつけ 🍷 収穫 ✂️ 刈り取り



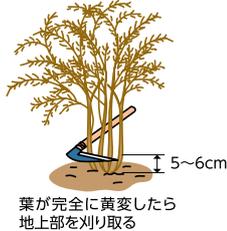
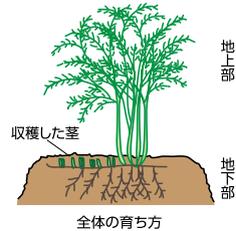
冬の手入れが翌年の出来を決めるアスパラガス

アスパラガスは野菜の中では長命で、一度植えれば数年は収穫が楽しめます。毎年良い収穫物を得るには、冬の適切な手入れが大切です。

若芽の収穫を一定日数で打ち切り、芽を伸ばしたままにすると、葉が開いて丈が伸び、葉の光合成作用が旺盛に行われ、秋になると同化養分が根に蓄えられ、11～12月には株全体が休眠に入ります。霜が3～4回降りると葉の黄化が進み、休眠はいつそつまつてきます。

ここから先の手入れで大事なことは、葉が深まっている頃を見計らって、地際から5～6cm上のところで葉を刈り取ります。この枯れ葉には茎枯れ病などの病原菌が付いているので、落ちた枯れ葉と共に畑の外に持ち出し、焼却または廃棄します。この処置が不十分だと、病原菌が茎葉の中で越冬し、翌年の発生源になるからです。できるだけ丁寧にかき集めて処分することが肝心です。

これら病害が発生すると、数年たった大株でも枯死し、大減収になってしまいます。茎葉をきれいに片付けたなら、まず株元に多くの土寄せをしていた場合には、土を

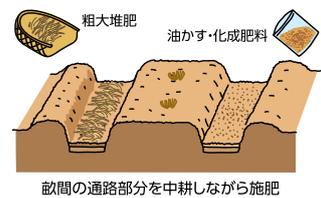


畝間に戻します。土寄せが少なかった場合には、そのまま畝間の通路部分を中耕しながら、畝の両側に深めの施肥溝を作り、その中に粗大堆肥（発酵度は中程度）と油かす、緩効性の化成肥料を施し、アスパラガスの根株を深く埋めるようにし、畝上に土を大きく上げておきます。こうすることで根株を冬の寒気から守ることができ、寒さが厳しい地域ほど土を大きく盛り上げることが大切です。

こうして越冬後の3月ころ、芽の萌芽（ほうが）に支障のない程度に土を取り除き（寄せ土戻し）、畝間に土を落とします。このとき春の追肥として、化成肥料や有機配合の肥料などを、1株当たり各大きさ3杯程度を目安に与えておきます。再三土を動かすことにより、地面付近に落ちていた雑草の種子の発芽を抑えられ、翌年の除草の手間が省けます。

栽培年数が長くなり、株元の根系が過密になり、株全体が浮き上がるようになったら、冬の休眠中に株全体を掘り上げ、分割して他の畑に、株間を広げて植え替えることで、再び勢いは回復するでしょう。

※関東南部以西の平たん地を基準に記事を作成しています。



農業PR隊長カツラギ通信はホームページで配信中!!

農業PR隊長カツラギ通信

検索

みてね!



カツラギ PHOTO GALLERY

